

中国東北地方におけるダークツーリズム： 「満洲」をテーマとする学生映像制作の可能性

一 戸 信 哉

はじめに

日本がかつて「満洲」と呼んだ中国東北地方は、日本による「植民地化」「傀儡国家化」が進められた地域であった。1931年、松岡洋右外相は「満蒙は日本の生命線」と唱え、翌年には傀儡国家満洲国が建国される。満洲国は中国では「偽満」と呼ばれ、そもそも国家ではなかったとされているが、その表現の是非はさておくにしても、清朝の末代皇帝であった溥儀の、清朝復活への野望が、日本によって利用されて、この地域に新しい「国」を作るという形になったことは間違いない。そこに溥儀のどのような意思を見出すにせよ、彼が無理やりその椅子に座らされたわけではない。

一方当時の日本は、国内の余剰人口の移住先として、また、資源の供給地として、満洲を重視した。余剰人口の移民がスムーズにはすすまず、後にさまざまな形で国策のキャンペーンが行われ、気乗りしないままに送り込まれた人々が終戦時に悲劇にあっているケースもあるだろう。資源の供給地としては、石炭をはじめ、多くの資源に恵まれた土地であったが、当時石油は産出されず、これが日本の南方進出の遠因にもなっている。のちに黒竜江省の大慶で大規模な油田が発見され、これが中国経済を支えることとなり、客観的に見れば、この地域の石油の算出が、歴史を大きく左右していったともいってよい。

ただし満洲には自由な気風があったともされ、内地では共産主義など摘発の対象になるような思想を信奉していても、大陸ではあまり悪目立ちすることはなかったともいわれる。あるいはハルビンなどでは、ロシア人などによる西洋文化の導入も進んでいたため、音楽文化なども盛んであったという¹⁾。後に女優李香蘭となる山口淑子は、瀋陽でイタリア人オペラ歌手に声楽を学び、歌手として女優として見いだされていった。

こうした複合的な要因を持ち、同時に広大な領域に広がる「満洲」、中国東北地方については、日本でも多くのドキュメンタリーが作られてきた。ドキュメンタリー番組の関心はとりわけ、満洲からの引き揚げの困難に向けられ、引揚者の苦難を伝えるものが多いのだが、同時にそれらが戦後長らく、日本国内で軽んじられてきたことも垣間見えてくる。近年は、戦後75年が過ぎ、生存者が減り続ける中で、なんとか証言を集めようという動きを、放送局が見せている。

各地の引揚者の声の収録は、学生による映像制作、インタビューによっても、記録を行うことができる。敬和学園大学の情報メディア教育においては、ドキュメンタリーを視聴

して分析するだけでなく、学生たち自身が、自分の両親が生まれるよりもはるか昔の「戦争」「引揚げ」について、撮影におもむいて取材し、映像作品にまとめる活動を行っている。映像制作は、「作り手」に回りながらアウトプットを残し、自らのメディア・リテラシーを問うことにもつながることが期待できる。

本稿は、2019年9月4日-11日にかけておこなった、中国東北地方、いわゆる東北三省の主要都市での調査内容をまとめるとともに、ダークツーリズムの観点から中国東北地方をどのように取り扱うかを検討する。とりわけ、メディア教育における可能性について、視聴すべきドキュメンタリー作品の検討とともに、制作実践の現状について述べることにする。

1. 中国東北地方の変貌：交通網の整備と人口減少

南北に伸びる東北三省の主要都市、ハルビン、長春（旧 新京）、瀋陽（旧 奉天）、大連の4都市は、ハルビン－大連間の1000km以上の範囲に点在している。かつて南満洲鉄道が運行していた高速列車あじあ号では、ハルビン駅から大連駅まで12時間30分を要したが、2012年に開業した哈大高鉄は、最短3時間半での移動を可能にした。筆者の調査においても、短期間に各都市を効率よく訪問することが可能であった。

このほかにも、ハルビンから瀋陽を経由して北京に至る路線（京哈高速鉄道）、遼寧省東部の丹東と瀋陽・大連をそれぞれつなぐ「瀋丹旅客専用線」「丹大都市間鉄道」、ハルビンとチチハル、ジャムス、牡丹江（哈牡旅客専用線）といった周辺都市をつなぐ路線などが相次いで開業している。2021年12月には、牡丹江とジャムスの間をつなぐ牡佳高速鉄道が開業した。

広大な「満洲」を移動する手段として、南満洲鉄道が整備した鉄道は、その後70数年を経て、高速鉄道としてアップデートされた。「辺境」とみられていた地域へのアクセス、地域内での移動の便宜も図られている。

こうした交通インフラの整備がすすむ一方で、中国東北三省は現在、中国南部に人口を流出させている。2010年から2020年にかけては、東北地方の人口は「1,101万人減り、9,851万人と、1億人の大台を割っ」ている²⁾。市場化と対外解放で大きく発展した広東省が、「2,171万人増え、1億2,601万人」となったのと対照的である。高速鉄道の整備を始めとしたインフラ整備により、中国大陆の移動の便宜性は高まっており、ハルビン－北京間は高速鉄道で5時間弱、北京－瀋陽間も2時間44分で移動できるようになった。この路線の全線開通は2021年1月であり、高速鉄道の整備が、北方の各都市にとってどのような効果をもたらすのか、先行きは不透明である。

2. 中国東北地方のダークツーリズム

2- 1. ハルビン（黒龍江省）

日中戦争のさなか、1940 年歌手東海林太郎が歌った曲に「ハルピン旅愁」がある。ロシア風の曲調で、ハルビンの風景や文化を織り込んだ「ご当地ソング」である。日本とロシアが覇権を競ったこの地では、ロシア文化の影響が色濃く残り、その「異国情緒」に日本人の関心が向かっていったことが感じられる。この歌の中にも登場する、キタイスカヤ（中央大街）には、一見してわかるロシア風の建築物が現在も保存されている（写真 2-1、2-2）。聖ソフィア大聖堂は街のシンボルともいえる存在となっている。こうした建造物が、ハルビンを「東洋のモスクワ」「東洋のパリ」と呼ばせているといつてよい。満洲各都市で存在感を示している、南満州鉄道運営のヤマトホテルについても、ハルビンの場合には、ロシアの建設した東清鉄道ホテルとして、1903 年にスタートし、その後 1935 年に満鉄の所有となりヤマトホテルとなっている（現在は龍門大廈貴賓楼となっている、写真 2-3）。

こうした建造物がそのまま維持されていることで、現在もハルビンには「異国情緒」が漂っている。しかしそれは同時に、この地が日露の覇権争いやそれに伴う現地住民の犠牲、さらには入植した日本人たちの犠牲が、多くもたらされたということも意味している。



写真 2-1 モデルンホテル。文化財指定されるとともに、愛国主義教育基地にも指定されている。筆者撮影。



写真 2-2 キタイスカヤ（中央大街）、筆者撮影。

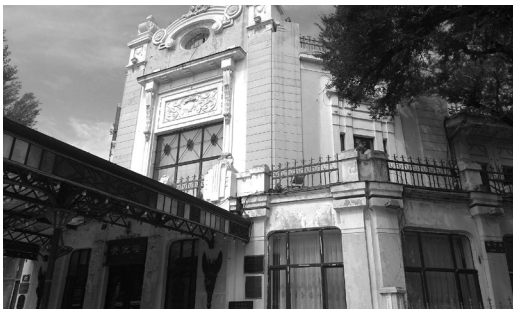


写真 2-3 龍門大廈貴賓楼（旧ハルビンヤマトホテル）、筆者撮影。



写真 2-4 旧ハルビンヤマトホテルに取り付けられた「歴史建築」のプレート。ハルビン市政府が指定している。筆者撮影。

2-1-1. 侵華日軍七三一部隊罪証陳列館

ハルビン郊外平房にある、日本軍のいわゆる「七三一部隊」に関する記念館である（写真 2-5）。この部隊は、関東軍防疫給水部本部で、軍医であった石井四郎をトップとして、医学者をはじめとする科学者を多く集めて、医学実験という形で中国人捕虜に対する人体実験を行なったとされる。終戦時に、資料の焼却、捕虜の殺害、施設の爆破をおこなったため、長らくその実態は明らかにならなかった。

この記念館は 2015 年にリニューアルされ、資料に基づく詳細な展示が行われており、保存されている当時の建物とともに見学することができる。2019 年に訪問した際には、部隊の前身である日本陸軍軍医学校細菌研究室、部隊組織図、実際に行われた細菌戦とその被害、「マルタ」と呼ばれる人体実験の対象とされた捕虜の「特別移送」の実態や選別基準、石井が実験資料とともに米国と取引したという展示、施設の破壊と周辺環境への影響などが、実験の様子とともに詳しく展示されていた。興味深いのは、中国各地の戦闘において、細菌の散布が行われて、その後長らく被害に苦しむ人々がいたという展示、あるいは、ペスト菌を持ったネズミが戦後平房地区の人々をペストに感染させたという展示も行われていた点である。

さらに、捕虜に対する実験の様子については、凍傷実験、屋外での細菌散布実験（はりつけにした捕虜の上から細菌を散布するもの）、ガス実験などが、リアルに再現されており、誰もが目を背けたくなるような展示となっていた。

元部隊員の証言も、反省の言葉とともに紹介されているが、とりわけ目を引くのが、ロビー付近の屋外にある自筆調書を彫り込んだ石碑である。軍の仕事として、残虐な行為に手を染めた日本人も、その多くは戦後反省しているということを示し、「和解」をうながすものとも受け取れる（写真 2-6）。

筆者訪問時にアテンドしてくれた現地ガイドの方が事前に交渉してくれたため、陳列館で販売している日本語の資料を一式購入することができた。陳列館が編集に関わっている資料集をはじめ、中国側で作られている日本語の書籍などを入手できたのは成果であったが、館内の売店では中国語で書かれた同種の資料だけが陳列・販売されており、この場における日本人の置かれた立場をあらためて考えることとなった。一方で、ロビーで流れている映像を見ると、2018 年放送の NHK スペシャル「731 部隊の真実 ～エリート医学者と人体実験～」がループ再生されているようで、NHK の報道内容については、一定の評価があるようにも感じられた。実際、中国外交部もこの番組を「勇気を持って歴史の真実を明らかにした」と称賛し、そのことが日中両国のメディアでも話題になった³⁾。



写真 2-5 侵華日軍七三一部隊罪証陳列館、筆者撮影



写真 2-6 元部隊員の自筆供述調書を大きく表示する展示、筆者撮影

2- 1- 2. 東北烈士紀念館

東北烈士紀念館は、抗日戦争で犠牲になった人々を紹介している展示館で、もともと日本の憲兵司令部が置かれていた建物に、1948年に設置されている⁴⁾。抗日運動に身を捧げて、犠牲になった人々の活躍と最期が紹介されているが、「名もなき」烈士のことも紹介しているためか、写真などの資料が全くない人物の紹介も多い(写真 2-7)。丁寧に展示を確認していくと、楊靖宇、趙一曼らが指導者として活躍した闘士であることや、緑川英子、佐々木源吾といった日本人が参加していたことがわかる(写真 2-8)。展示を通して理解できるのは、革命のためには多くの犠牲があったということなのだが、一方で「日本が東北地域で影響力を誇示しつつ、国民党と戦争を続けて、ソ連参戦でなすすべもなく敗れた」という日本人の理解の中で、この地域でもゲリラ的な戦いを続けていたという共産党の闘士たちの戦いをどのように位置づければいいのかという思いも、多くの日本人は持つであろう。この場所に限らず、中国の愛国教育を進める「基地」として指定されている、いわゆる「レッドツーリズム」の拠点においては、同様の現象が見られる。別の見方をすれば、いわゆる「歴史認識」をめぐる日中両国民のギャップの源泉というのも、こうした展示から読み取ることができる⁵⁾。

地下では、「偽満洲国哈尔滨警察厅遗址及罪恶展」という展示が行われている。日本がどのように抗日運動を取り締まったのか、摘発事件、アヘン・花街の容認、拷問の様子などが展示されているほか、日本の警察で働いて弾圧に加担した中国の人々が、「漢奸」としてどのように裁かれたか(多くが死刑になっている)も展示されている。

この建物は「一曼路」という通りに立地しているが、これは各フロアで大きく扱われている抗日烈士の一人趙一曼のことを記念している。通りを挟んだ向かい側には、趙一曼の大きな銅像と記念碑が建てられている(写真 2-9)。



写真 2-7 抗日運動、国共内戦を通じて、東北で活動した闘士たちを紹介。中央の人物には写真がない。筆者撮影



写真 2-8 中国共産党に身を投じた日本人たちについても紹介されている。写真は日本人医師の佐佐木源吾、筆者撮影



写真 2-9 東北烈士紀念館近くに設置されている趙一曼像。「民族英雄」と書かれている。筆者撮影。



写真 2-10 安重根記念館からハルビン駅構内を覗き見ると、伊藤博文暗殺の現場であることが示されている。筆者撮影。

2- 1- 3. 安重根記念館

ハルビン駅の駅舎内に、1909年に伊藤博文を暗殺した朝鮮の民族主義者、安重根の記念館が置かれている。安重根のおいたち、伊藤暗殺とその後の経緯について展示されている。と同時に、「暗殺現場」とされる駅構内をガラス越しにのぞくことができる（写真 2-10）。後述する旅順監獄にも同じように安重根に関する展示をみるようになったが、いずれも筆者以外に訪問者はいなかった。この施設は、中国と韓国が連携して日本を批判するという象徴的な展示であるともみられているが、実際にはハルビン市民や中国各地からの訪問者の多くが、ここを訪れるという現象は確認できなかった（写真 2-10）⁶⁾。

2- 1- 4. 中日友好園林（方正県）

ハルビン周辺には、多くの満蒙開拓団入植地があったため、引き揚げた人々やその家族が、後にその跡地を探し当てて訪ねていくケースがある。たとえば、新潟県柏崎市から入植した満洲柏崎村は、松花江沿いの通河、依蘭の近くにあったが、すでにその跡地であることを示すものはほとんどなかった。元開拓民である巻口弘氏らが、2005年5月に現地を訪問し、跡地を探し当てたという⁷⁾。旧開拓村の多くが同じような状況にあり、第三者

が訪ねて行って、何らかの痕跡にたどり着くのは極めて困難になっていると言ってよい。この地域で唯一、満蒙開拓の痕跡を明確に残しているのが、方正県の「中日友好園林」である。2019年9月の訪問では方正県に行くことができなかったが、ハルビン近郊で「満蒙開拓」の足跡を学ぶ場所としてあげておきたい。方正県はハルビンから200キロ弱の距離にあり、ここには「日本人公墓」が設置されている。この公墓は、現地中国人と再婚し、現地に残留した松田ちゑ氏が政府に陳情し、1963年に建設された。その後文化大革命の時代にも破壊されずに生き延びた施設であるが、現在は予約がなければ入ることもできず、慰霊の旅で訪れるのであれば、アクセスは容易ではないだろう。

2-2. 長春（吉林省）

吉林省の省都長春は、かつて「満洲国」の首都新京が置かれ、計画的な都市計画が行われたが、その際に建設された街路や建築物が、現在も利用されている。満洲国時代の遺構として、もっとも整備されているのは「ラスト・エンペラー」溥儀の宮殿であった偽満皇宮博物院で、見学も可能である。このほかにも多数の建築物が現在も利用されているが、それゆえに立ち入りが難しいところも多い。市内中心部の主要な建造物は、ガイドブックにも紹介されているので、撮影により警備関係者に咎められないよう注意すれば、歩いて巡回も可能である（写真2-11、2-12）。以下、2019年9月に訪問した主要施設について述べる。

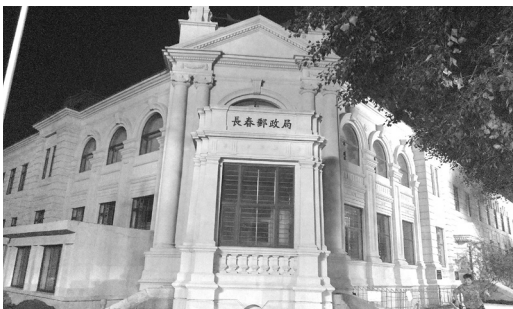


写真 2-11 長春郵政局。旧新京中央郵便局。筆者撮影。



写真 2-12 春遊賓館。旧新京ヤマトホテル。筆者撮影。

2-2-1. 偽満皇宮博物院

1932年の満洲国建国に際して執政となり、その後満洲国皇帝に即位した溥儀が暮らした場所である。現在は博物院として、皇宮の施設を紹介するとともに、溥儀の生涯も詳しく解説している。「関東軍の操り人形」「侵略戦争を支持」といった彼の行動を糾弾するような日本語タイトルがつけられてはいる（写真2-13）ものの、全体的には日本の侵略戦争に加担させられた人物像が強調されるとともに、戦後撫順の収容所で思想改造を受けて、

晩年は静かに一公民として暮らしたという点が強調されている(写真 2-14)。日本人では、関東軍高級参謀で「御用掛」であった吉岡安直の執務室が紹介され、彼が溥儀を監視・制御する役割を果たしたという説明がされていた(写真 2-15)。ソ連侵攻後の溥儀の逃亡に同行した吉岡は、溥儀とともに捕えられ、モスクワで死亡している。溥儀は東京裁判において、第三夫人の譚玉齡を吉岡が毒殺したと証言したが、その真偽を含めて、実際の溥儀—吉岡の関係や吉岡個人に対する評価は今日さまである⁸⁾。

館内では、「長春偽満建築旧址写真展」が催されており、長春市内にある日本時代の建築物の写真と、現在の保存状況に関する説明が展示されていた(写真 2-16)。期間は明示されていなかったが、長期的に展示されているように見受けられた。「偽満」という評価を前提にしつつも、その結果この地に残された建造物を、長春がどのように継承してきたかは、関心の対象となってきたのであろう。

敷地内には、満洲国で天照大神を祀るために建てられた「建国神廟」の礎石などが保存され、その跡地が紹介されている(写真 2-17)⁹⁾。



写真 2-13「東北の主権を売り渡す」という日本語訳が表示されている。筆者撮影。



写真 2-14 晩年は、北京で家族とともに静かに暮らしたという点が強調されている。筆者撮影。



写真 2-15 御用掛である吉岡安直について、執務室前の説明。溥儀の言動を監視、制御したと説明されている。筆者撮影。



写真 2-16「長春偽満建築旧址写真展」。筆者撮影。



写真 2-17 建国神廟跡。筆者撮影。



写真 2-18 長影旧址博物館。筆者撮影。

2- 2- 2. 長影旧址博物館

満洲国の国策会社であった満洲映画協会（満映）の跡地に、長春映画撮影所（長影）が設置され、戦後も引き続き映画制作が行われた。現在はシネコン・ホールなどを併設した博物館となっている（写真 2-18）。

戦前の満映は、1923 年に満鉄の映画班として発足、満洲国成立後に独立し、主に満洲国の正当性、日満親善をアピールするプロパガンダを映画で宣伝するようになった。1938 年に中国人女優としてデビューすることになった李香蘭（本名山口淑子）の活躍により、ヒット作を世に出すようになる。現在館内で、「満映」時代の出来事が、詳しく展示されているわけではない¹⁰⁾ が、その後新中国での映画製作に貢献した日本人について紹介されており、とりわけ人形アニメーション作家の持永只仁については、写真入りで紹介されている¹¹⁾。

戦後の映画作品については、時代ごとの作品テーマの変遷がうかがえる部分もあるが、中国映画についての予備知識がなければ、個々の作品、出演俳優などから、短い時間で知見を得るのは難しいように感じられた。

2- 2- 3. 中日友好楼

長春市内中心部の平陽街に「中日友好楼」という看板が見つかる。1990 年に建てられたこの建物には、中国残留孤児を育てた中国人養父母たちが暮らしてきた。最盛期には、29 組の家族が暮らしていたという（写真 2-19）。

終戦時の混乱により、親と離れた多くの日本人孤児が、現地に残された。日中国交正常化後の 1981 年に始まった肉親探しにより、日本人の多くが中国残留孤児の存在を知り、さらに山崎豊子の原作で、1995 年にドラマ化された「大地の子」により、日本社会でも中国人養父母の存在が広く認識されるようになった。中国人養父母は、「敵国の子を育てた」として、非難されたケースもあり、文化大革命など中国社会の変化の中で、日本人孤児を育てるために苦難を強いられた。一方で、1980 年代からの肉親探しの成果として、身元の判

明した日本人孤児の多くが、日本へ帰国し、中国人養父母は中国に残されることになった。複雑な心境の中で、日本人孤児を母国に戻することを容認した養父母の苦悩を思い、その生活を支えるため、満洲から帰国した日本人が長春市に寄付し、中日友好楼が建設されている。

2019年9月に筆者が訪れた際には、最後に残った養母の崔志栄さんが、現在も暮らしているという説明を受けた（当日は不在）。この時点では、建物に大きく「中日友好楼」の看板が取り付けられていたが、その後老朽化を理由として取り外されたという。報道によると、崔志栄さんも、2020年9月に98歳で亡くなったとされる¹²⁾。

最後の養母となった崔さんが亡くなったあとも、養父母の子孫が暮らしているが、建物の老朽化も進んでおり、今後の利活用も課題となっている。「敵国の子」を育てた人々の「志」について、中国での関心をどのように高めていくか（高めていくべきか）は、中国国内の世論も一様ではないように見える。たとえば、2012年8月には、人民網日本語版において、崔志栄さん特集した記事が発表されており、「中国の母親の愛は血筋や国境、恨みを越えたもので、こうした愛は人類の最も偉大な感情だ。」とする専門家のコメントも紹介されている¹³⁾。中国人養父母の働きをどのように顕彰し、それに関連して日本人孤児のたどった苦難を中国でどのように伝えるか、両国の間で課題が残されているといっていよい。日本では、帰国した残留孤児の人々が社会に適応できず、さらにその子供たちが反社会的集団に参加して問題を起こすといった事象が取り沙汰されてきた¹⁴⁾。現在は残留孤児さらには2世の高齢化も進み、言葉の壁を抱えたまま、老後を過ごす様子も報じられるようになってきている¹⁵⁾。

2022年2月から全国上映が始まる映画「再会の奈良」（監督 ポンフェイ - 鵬飛）¹⁶⁾は、残留孤児の養母が、行方不明になった養女を探すストーリーとなっている。中国ではすでに2021年3月に公開された。



写真 2-19 中日友好楼。筆者撮影。

今回の訪問では、朝鮮族の多く暮らす吉林省東部、延辺朝鮮族自治州を訪問できなかったが、かつて間島省が設置されたこの場所は、抗日運動の盛んであった場所である。延吉市内からさらに郊外に移動し、龍井という街には、日本の旧間島日本総領事館の建物が残されている。

2-3. 瀋陽（遼寧省）

瀋陽は遼寧省の省都である。満洲国時代には奉天と呼ばれた。17世紀初頭、清の初代皇帝ヌルハチが、後金国を建国したときには、この地は「盛京」とされている。その後北京への遷都が行われるが、この地はその後第二の都として扱われており、ヌルハチの陵墓や故宮博物院など、清王朝時代の重要史跡が残されている。また、遼寧省の東部には、北朝鮮と国境を接する丹東があり、瀋陽はその起点ともなっているため、いわゆる「コリアンタウン」もあり、観光地化している。

2-3-1. 九・一八歴史博物館

1931年9月18日、関東軍が南満州鉄道の線路を爆破し、これをきっかけに中国東北地方に侵攻する。この「満洲事変」の引き金となる柳条湖事件が起きた場所に、九・一八歴史博物館が設置されている。2019年に訪問した際には、閉館日で、中に入ることはできなかったが、カレンダーの形をして9月18日を思い出させる巨大なモニュメントを確認することができた（写真2-20）。毎年9月18日には、このモニュメントの前で大規模な記念式典が行われている。「918」をきっかけに日本の中国侵略が始まったという認識は、日本人の間ではあまり広まっておらず¹⁷⁾、日中にギャップがあることは明らかであり、そのことを理解するには、この石碑を敷地の外から見ただけでも十分意味があった。館内の展示は、抗日戦争の様子を展示したものであり、ハルビンの東北烈士紀念館を見た後には、同じような違和感があるという評価もあり、おそらく類似したコンセプトの下に作られていると考えられる。この展示の中には、満蒙開拓青少年義勇軍に対して「武装農民」という呼称が用いられているという¹⁸⁾。満蒙開拓青少年義勇軍としてこの地域に渡った人々は、「武装農民」と呼称されるような好戦的な人々ではなく、国の政策により満州に送り出されて犠牲になった若者たちと見るのが、日本の一般的な評価であろう。しかしなるほど「義勇軍」なのであり、「武装農民」ととらえるのが、「敵」に対する見方としては正しいと言ってよいであろう。



写真 2-20 九・一八歴史博物館、筆者撮影。

2-3-2. 張作霖爆殺事件現場

満洲事変に先立つ1928年6月4日には、奉天近郊の皇姑屯で、軍閥の指導者張作霖が爆殺されている。日本では一般に、張作霖爆殺事件と呼ぶが、中国では皇姑屯事件と呼ばれる。この事件は、国民党に接近し始めた張作霖が邪魔になった関東軍の高級参謀による謀略事件と評価されている¹⁹⁾。

爆殺事件のあった皇姑屯は、京奉線と満鉄線が交差している場所で、満鉄線の橋脚に火薬が仕掛けられ、張作霖の乗った鉄道が爆破されている。

2019年の訪問では現地ガイドの案内により訪問し、鉄路が交差しているポイントとその近くに設置された記念碑（1928. 6. 4の日付が大きく表記されている）を確認できた。



写真 2-21 張作霖爆殺事件現場、筆者撮影。



写真 2-22 張作霖爆殺事件現場、筆者撮影。

2-3-3. 瀋陽・中山広場

満鉄による奉天駅周辺の開発の中で、都市整備が行われ、その中心となったのが、瀋陽の場合にも現在中山広場と呼ばれている場所となる。かつては大広場と呼ばれていた。この場所に、多くの日本時代の建築物が現在も残されており、広場を中心に、中山路歴史文化街区ともなっている。

広場を取り囲む建物としては、旧ヤマトホテル（現遼寧賓館）、旧横浜正金銀行奉天支店、奉天警察署などの建物がある。それぞれの建物の前には、日本時代の建物であることを明記する標記がある。また旧ヤマトホテルの中には、過去に宿泊した要人のリストが掲示されているが、関東軍や満鉄で要職をつとめた日本人の名前も一覧に掲載されている（写真 2-23、2-24）。



写真 2-23 遼寧賓館外觀。筆者撮影。

[illegible]

写真 2-24 遼寧賓館館内。過去に宿泊した要人リストの中に、日本人の軍関係者等の名前も含まれている。筆者撮影。

2019年の調査では、瀋陽での滞在期間を十分確保できなかったため、瀋陽の周辺にある撫順、丹東などを訪問することはできなかった。撫順には、ダークツーリズムの観点からも重要な史跡がある。

満洲国時代、撫順は露天掘りの炭鉱で知られる場所で、この炭鉱の様子は現在も参観台から見る事ができる。また、撫順戦犯管理所は、溥儀や日本人戦犯が収容された場所としても知られている。またこの撫順炭鉱の抗日軍による襲撃により、関与を疑われた平頂山集落の人々が虐殺されたのが平頂山事件である。この事件に関する展示を行っているのが、平頂山惨案遺址紀年館である。これも撫順市内にある。

南西部の遼東湾に面した街、葫芦島も瀋陽を拠点にたずねることができる。高速鉄道京哈線の葫芦島北駅までは、瀋陽から2時間弱、距離は250km以上あるので、短期滞在の旅行者には高速鉄道以外の選択肢はなさそうだ。葫芦島は、戦後の引揚げ者の多く、100万人以上が、引揚げ船に乗った港町である。ハルビンやさらに北方で暮らしていた人々が、多くの犠牲を出しながら南下し、最後に日本行きの船に乗った場所であるため、今も日本人の訪問者はあるようだが、現地にはいくつか記念碑が立つのみだという。

2-4. 大連・旅順

大連は、遼東半島の最南端に位置し、日本とロシアが覇権を争った港湾都市である。大連という地名は、大連と隣接する旅順を租借したロシアが、この地域を「ダーリニー」と名付けたのが始まりで、その後日露戦争により日本の租借地になったあと、「大連」と正式に名付けられることになった。大連市内には、瀋陽と同じく、日本時代に整備された中山広場があり、日本時代の建築物が多数残されているほか、ロシア人、日本人がそれぞれ集住していた地域もわずかながら残っている。

また近隣の旅順は、日露戦跡の遺構が多数残されているほか、旅順監獄もあり、ダーク

ツーリズムの観点では外せない場所が多く残されている。

2019 年の訪問の際は、中山広場周辺の建物を確認できたものの、そのほか大連市内中心部にはあまり重要な建造物を発見することはできなかった。旧日本人街の旧連鎖街といわれるエリアには、やや古い建物がならんでいることを確認できたが、それ以上に日本時代の痕跡のようなものを見つけることはできなかった。

2- 4- 1 大連・中山広場

日本統治時代大広場と呼ばれた中山広場には、日本統治時代から残っている建物が多く残されている。代表的なのは、大連賓館と名を変えた旧ヤマトホテル（写真 2-25）、旧横浜正金銀行大連支店、旧大連市役所などである。ここで興味深いのは、「大連故事 歴史建築」と題された QR コード付きの案内板（写真 2-26）で、これらの建物の外側に設置されていた。この QR コードを読み込むと、それぞれの建物に関する詳しい説明を聞くことができる。もちろん、日本時代にどのような目的で使われていたのかも説明には含まれている²⁰⁾。



写真 2-25 大連賓館外観。筆者撮影。



写真 2-26 大連賓館館紹介二次元コード。中山公園内の歴史的建造物には、同様の景観に調和した金属製の二次元コードが貼り付けられていた。筆者撮影。

2- 4- 2. 二百三高地 爾靈山記念碑

日露戦争の激戦地旅順での戦いのうち、日本の総攻撃による日露両国に多大な損害をもたらしたのが、二百三高地である。激しい戦いの末に二百三高地を奪取した日本は、弾丸型の記念碑を建立している（写真 2-27）。

この戦いで犠牲になった多くの兵士たちを弔うという意味で、この塔は建てられているのだが、この日本側の見方に、非常に厳しい評価を下しているのが、敷地内の案内板である（写真 2-28）。この塔は、「日本軍国主義による対外侵略の罪の証拠と恥の柱」と断じている。



写真 2-27 雨靈山記念碑。筆者撮影。



写真 2-28 二百三高地案内板。「日本軍国主義による
対外侵略の罪の証拠と恥の柱」と断じている。筆者撮影。

2- 4- 3. 東鶏冠山堡壘

ロシアが東鶏冠山に、コンクリートで作った要塞を、日本軍がトンネルを掘って潜り込んだ上に爆破し、陥落させたという激戦地である。コンクリートの設備は一部残された部分が保存されている（写真 2-29）。付属の展示室では、日露の戦いの様子が写真で紹介されていたが、なかには、無辜の旅順の人々が、日本軍によって処刑されたとする写真も展示されている。この写真の信憑性はさておくとしても、ここにもまた、日露の戦いに巻き込まれて被害を被った中国の人々、という構図が示されている。



写真 2-29 東鶏冠山堡壘。筆者撮影。

2- 4- 4. 旅順日露刑務所旧址

旅順の刑務所は、1902 年にロシアが建設し、その後日本が増築していて、その違いがよくわかるように紹介されている。刑務所の展示であるので、絞首台のほか、厳しい拷問、労働などの様子がわかる展示が中心となっている。また、ハルビン駅で伊藤博文を暗殺した安重根が拘置されていた部屋も残されており、特設コーナーとして設置されている。きれいに整えられているのであるが、他のコーナーに比べて、訪問者が多いようには見えなかった。

2- 5. 小括

以上 2019 年 9 月に実施した、現地調査を元に中国東北部で確認したダークツーリズム関連の遺構等について述べてきた。満洲国時代の遺構から、日本人観光客が学ぶべきポイントは多数あるのだが、いわゆる「悠久の歴史」をめぐるような旅、あるいは日本を凌ぐ最先端都市の一端をのぞくような旅、といった要素は見出しがたく、寒冷地であることもあって、日本人の訪問者が今後増えていくようには思われない。松村嘉久によると、満洲国の近代遺産の訪問者は、「80 年代の日本人客から、90 年代半ば以降、中国の国内観光客へと劇的に移行した」と指摘している²¹⁾。長春について松村は、偽満皇宮博物院は「負の遺産」を強調する側面がある一方で、それ以外の近代建築については、「負の遺産」としての側面が強調されず、「淡々と利用」されていると指摘する。

ともあれ、1980 年代に中国東北地方を訪れた日本人は、戦争時代を知る人々であったのに対して、戦後 75 年を過ぎた今日、「満洲国」への日本での関心は、かなり低下しているとみてよいだろう。関心が低下したことそのものは、やむをえないところもあるだろうが、レッドツーリズムとダークツーリズムをかけ合わせた中国国内向けの「満洲国」ではなく、より若い世代の日本人に向けたダークツーリズムの形は構想できるだろうか。筆者の取り組んでいる情報メディア教育の取り組みから、可能性を探ってみたい。

3. 「満洲」と情報メディア教育

これまで見てきた通り、2019 年 9 月の一週間に渡る調査でも、旧満洲の広大な地域の全貌を把握し、ダークツーリズムによる継承を行うのは容易ではなかった。またこの地域で見る内容としても、中国の人々に対して示されるレッドツーリズムの要素を持った抗日戦争の文脈だけでなく、人知れず保護され継承されている日本人たちの足跡、さらにこの地域では国境線上で独自の歴史・文化を歩んだ朝鮮の人々の足跡と、多様な観点から見ていったときに、注目すべき遺構も多く重層的に残されている。この点は、中国の他地域とはかなり状況が異なるように思われる。

戦後 75 年以上が経過し、満洲の記憶をとどめる人は少なくなったが、多様な情報を受け止めて発信することや、それを現地で確認しながら旅をする人々が出てくれば、新しい形での記憶の継承が可能になるであろう。筆者の取り組んでいる情報メディア領域において、いくつか可能性を探ってみたい。

3- 1. ドキュメンタリーで見る「満洲」

「満洲」に関わるドキュメンタリーは、戦後 70 年、75 年といった節目に、つねに新しい作品が放送され続けている。すでに当時を知る人々が少なくなる中で、証言に基づく番

組作りは難しくなりつつあるが、発掘された資料をもとにしたデータジャーナリズムの手法、あるいは、発掘資料を用いた再現映像などにより、現在も作品が生み出され続けている。ドキュメンタリーの視聴しやすさはさまざまであるが、最近はウェブでも公開されているものが多い。NHK の場合には、過去にさかのぼって番組がすべて公開されているわけではないが、書籍化や Blu-ray ディスクなどでの販売のほか、NHK オンデマンド、アーカイブスでの公開、さらには、放送の際に録画された素材を公開する戦争証言アーカイブスも公開している。

これら映像を、撮影編集まで丁寧に見ていくことによって、内容だけでなく、制作手法についても学ぶことができる。筆者の教育活動では、3-2 で述べる映像制作の事前学習としての側面を持たせている。多くの学生にとって、これまであまり接してこなかったテーマ、少なくとも「深掘り」した経験のないテーマであり、強い印象を受けるものも多いが、同時に制作手法にも着目するようにしている。

以下、本稿に関連するテーマで、比較的視聴しやすいと思われるものを挙げる。

3- 1- 1. 「内鮮満周遊の旅 満洲篇」

現在の作品を見るのと同時に、かつての日本人が「満洲」をどのように描いていたかを見ることも重要であろう。1937 年にこの地域の「旅行案内」として、満鉄映画製作所が作った作品として、『内鮮満周遊の旅 満洲篇』がある。大連を入りに、「満洲」各地を鉄道で巡っている形で手際よく紹介しており、「満洲国」時代の各地域の様子を理解するのに格好の素材となっている²²⁾。

3- 1- 2. NHK スペシャル「満蒙開拓団はこうして送られた ～眠っていた関東軍将校の資料～」(2006 年 8 月 11 日放送)

27 万もの人々を満州に送り込み、悲劇の結末を招いた満蒙開拓団はどのように始まったのか。その仕掛け人として、関東軍将校東宮鐵男という人物の姿を描き出した作品である。この作品では、東宮とともに、拓務省が招聘した農本主義者加藤完治の動きにも焦点を当てている。東宮の当初の計画では、内地農民ではなく武装した朝鮮人を主力とする編成となっていたが、内地農民を訓練して「武装農民」として入植させるという加藤の案を東宮が受け入れたとされている。

加藤はその後、満蒙開拓青少年義勇軍の設立を推進し、送り出し前の訓練を行なった満蒙開拓青少年義勇軍訓練所（茨城県内原町、現水戸市）の所長に就任している。

作品としてはやや古いが、張作霖事件から入植計画を作っていく過程にふれ、当初から無理を承知ではじめた事業であることをうかがわせる描写により、多くの犠牲を招いた満

洲移民の概要がよく理解できるようになっている。すでに証言者がほぼいなくなった状態で、どのように作品化を制作するかという点でも、参考になる点が多い。

3- 1 - 3. NHK スペシャル「731 部隊の真実 ～エリート医学者と人体実験～」(2017 年 8 月 13 日放送)

ロシアで行われたハバロフスク裁判の音声記録を発掘したドキュメンタリー。わずかな証言を集めながらも、音声記録と資料を用いながら、エリート医学者たちがどのように実験に参加していったかに迫っている²³⁾。731 部隊の実態に迫ったドキュメンタリーには、ほかに TBS が 1976 年に制作した「ある傷痕～魔の 731 部隊」がある。報道ディレクターの吉永春子氏が、自らマイクを持って元部隊員を訪ねあるく非常に迫力あるドキュメンタリーで、大きな反響をよんだ。2016 年に吉永氏が死去したのをを受けて再放送されている。1970 年代の取材の段階で、ハバロフスク裁判の証言記録は入手されていて、元部隊員にその内容を確認していくのだが、みな一様に証言内容を否定ないし拒否している。TBS のドキュメンタリーで証言内容を否定した人たちの発言内容は、あらためて 2017 年の NHK スペシャルで音声で公開される。

部隊員たちの日本への帰国がかかっていたであろう、ハバロフスク裁判の信憑性については、まだ議論の余地はあるかもしれないが、2 つの作品の対比は明瞭であり、同時に 40 年近いブランクを経て、過去のドキュメンタリー作品の意義が再確認される。ハルビンで侵華日軍七三一部隊罪証陳列館を訪問する場合には、事前に 2 つの作品を見ておきたい。

3- 1 - 4. 世界・わが心の旅「李香蘭 遥（はる）かなる旅路～中国、ロシア」(NHK 総合、1998 年 11 月放送)

女優李香蘭として活躍した山口淑子氏が、50 数年を経て、自らの足跡をたどっていくもの。1998 年に放送されたものが、山口氏の訃報を受けて、2014 年 9 月に追悼放送されている。番組の中では、生まれ育った街撫順、そこで目にした平頂山事件の容疑者取り調べの様子、奉天に引っ越した後の友人リュウバとの出会いと歌手として見いだされるきっかけ、満映を訪問する様子などが紹介される。中国人女優李香蘭を演じ続けた苦悩が、よくわかる内容になっている²⁴⁾。番組後半では、ロシアをたずねて、「漢奸」の疑いを晴らしてくれた友人リュウバをたずね、数十年ぶりに旧交をあたためる。

李香蘭として生きた山口氏の半生を紹介する内容でありつつも、彼女の人生の中で大きなウェイトをしめる、日本・中国の摩擦と戦争、さらにロシア系の友人との旧交など、この時代に中国大陆で起きた出来事を理解できる内容にもなっている。ロケ地としては、撫

順、瀋陽などが登場し、遼寧賓館で李香蘭が見いだされたときの様子も説明されており、事前学習に適している。

3-1-5.「決壊 ～祖父が見た満州の夢～」(民教協スペシャル、2018年2月、民放各社にて放送)

分村移民の形で満洲に向かい、最後は村民たちが集団自決した、河野村開拓団。開拓団を送り出す側のリーダーであった、長野県河野村(現豊丘村河野)の村長、胡桃沢盛氏は戦後、送り出した側の罪の意識に苛まれ、自殺した。大正デモクラシーから自由主義を学んだ、農村のリーダーは、のちに戦争に協力し、村を発展させるために、開拓団を送り出すことになった。孫の胡桃沢伸氏が、祖父盛氏の日記からその苦悩を知り、中国に渡って開拓団の足跡をたどる。

国策に応じるべく、地域のリーダーたちや教員たちが、苦悩しながら開拓団員や義勇隊員を送り出したのは、おそらく長野県に限らない。ただ、長野県の場合には、左翼運動に関わった教員の摘発が広範に行われた結果、その反動で国策に従順にならざるをえなかったという事情があり、飛び抜けて多い移住者を送り出している。こうした中で、進歩的な立場にあった胡桃沢村長もまた、この流れに抗うことができなかったということになる。きわめて重いテーマであるが、複雑な当時の国内事情を理解するにも適切な番組である。

胡桃沢盛氏の足跡については、NHKも2016年8月、NHKスペシャル「村人は満州へ送られた ～“国策” 71年目の真実～」の中でとり上げている。

下伊那地方は、長野県の中でも犠牲になった移民の数が多かったという事情があるようで、近隣の阿智村に、満蒙開拓平和記念館が設置されている。阿智村を訪問する際には、河野村の出来事についてドキュメンタリー等で学ぶとともに、旧河野村の慰霊碑も訪問することが理解を助けるであろう。

3-1-6.「史実を刻む～語り継ぐ”戦争と性暴力”」(テレメンタリー2019、2019年8月 ANN 系列局で放送) / ETV 特集「告白～満蒙開拓団の女たち～」(2017年8月5日放送)

逃避行を続ける開拓団の人々が、武装しているソ連兵から庇護を受けるために、「性接待」を行っていた。長年秘して語られなかった真実を、岐阜県黒川村から満州に渡った「黒川開拓団」の人々が明らかにした。この証言を放送した番組はいくつかあるが、放送番組の中で最初に扱ったと思われるのが、2017年8月にNHKが放送した「告白～満蒙開拓団の女たち～」である²⁵⁾。テレビ朝日系列のシリーズ「テレメンタリー」は、YouTubeチャンネルでのドキュメンタリー公開に取り組んでおり、2019年8月に放送された「史

実を刻む～語り継ぐ“戦争と性暴力”」も公開されている。このほか、日本テレビ系列のNNNドキュメント（制作：山口放送）の「記憶の澱」（2017年12月3日放送）は、戦争における日本人の「加害」と「被害」の両者の記憶を織り交ぜた作品だが、この中でも黒川開拓団の「性接待」の記憶が紹介されている。

3- 1- 7. NHKスペシャル「“大地の子”を育てて～中日友好楼の日々～」(2004年12月放送)

長春の中日友好楼で暮らしていた存命であった最後の養母が2020年に亡くなったが、この集合住宅で養父母たちが暮らしていた日々については、2004年12月にNHKスペシャルが放送している。現在も「NHKティーチャーズ・ライブラリー」により、教育用に借り出すことができるようになっている²⁶⁾。

このほか、新型コロナウイルスに苦しむ現代社会になぞらえる形で、感染症に苦しんだ引揚げ前の満洲日本人居留民たちと医師たちを描いた「BS1スペシャル 満洲 難民感染都市知られざる悲劇」(2021年3月28日放送)、満洲から引き上げた人々の「戦後開拓」で、福島第一原発近くに入植した人たちの悲劇を描く「彼らは再び村を追われた 知られざる満蒙開拓団の戦後史」(ETV特集、2019年3月23日放送)、満洲建国大学で学んだ元台湾人学生の孫である記者が大学の理想と現実に迫った「消えた大学 幻の満洲の夢」2022年1月30日 日曜日(テレメンタリー、ABCテレビ制作、2020年11月放送)²⁷⁾などが、近年放送されている。

映像ドキュメンタリーは、予備知識の乏しい視聴者にもわかりやすくビジュアル化することが求められるが、「満洲」に関しては当事者インタビューが難しくなっており、その分、資料やデータを使いながら立体的な表現を模索する動きが見られる。こうした制作手法を大学生が駆使するのは難しいのだが、一方で貴重な「証言者」に地域でたどり着くことの重要性を認識する契機ともなっている。

3- 2. 学生による映像制作と満洲

筆者は敬和学園大学において、2012年から、学生による映像制作に取り組んできたが、その中で、「満洲」を含む戦争に関連する作品制作の可能性を探ってきた。先行事例として、中央大学、北星学園大学、稚内北星学園大学などの取り組む戦争関連のドキュメンタリー作品を参照し、新潟県の学生の独自の視点で、作品制作ができないかを模索している。中央大学では、「多摩探検隊・につぼん列島探検隊」というYouTubeチャンネル²⁸⁾の中で、多摩地区を中心に、全国各地の戦争に関する作品を多く発表している。稚内北星学園大学

は、樺太に近い特性を生かして、樺太・サハリンに関連した作品を多く発表している²⁹⁾。前提となる学生の予備知識のレベル設定は、大学によってさまざまであるが、あまり予備知識と予断を持たない学生たちが、インタビューを行うプロセスで感じた驚きを素直に作品にぶつけていくところに、学生作品の良さが現れるという点は、共通している。

これまでのところ、敬和学園大学からは、以下のような作品を制作している。

「見附と満蒙開拓団～わたしのまちの記憶～」(制作：亀山咲・笹川拓真・若山真生)

「中国残留邦人2世の現在：日中の狭間で」(制作：張衛 有本らな 張梅、令和元年度新潟県 自作映像・視聴覚教材コンクール奨励賞)

「満洲キリスト村と賀川豊彦」(制作：長島瞭太郎、吉田結香)

「中国・大連の『新潟物産館』～1,520kmをつなぐ写真～」(制作：渡邊太智、張衛、張梅、にいがたデジコングランプリ 2021 にいがた市お宝部門：グランプリ／新潟市長賞)

「語り継ぐ満洲柏崎村の軌跡」(制作：岸田瑠瑠、小田颯太、和田剛輝、令和3年度新潟県自作映像・視聴覚教材コンクール優秀賞)

このうち「中国・大連の『新潟物産館』」は、満洲移民や引き揚げとの関係はあまりないが、残りの4作品はいずれも満洲開拓民との関係が深い作品になっている。制作前の段階で学生の関心や予備知識が十分にあるわけではないのだが、人々が直面した苦難を知ること、取材に精力的に取り組むことができた。ただし、最終的に作品をまとめていく際に、限界を感じているケースも多く、知識と表現力をいつどのようにレベルアップしていくかが課題になってくる。

学生の取材・撮影は、「キリスト村」のみ東京都内で実施したが、残り4作品については、すべて新潟県内で行われている。国外での撮影は行われていない。ただし、本稿で扱っている2019年の調査の際、筆者が撮影した映像を一部提供しており、「残留邦人2世」においては中日友好楼の映像、「大連と新潟」においては大連市内の映像が使われている。取材対象の現場やその近くに降り立ってみた経験を欠いているのは、知識の立体化やそれに伴う制作意欲に影響が出て、細部にこだわった撮影・編集にならないという面があるであろう。満洲に関しては、長野県阿智村の満蒙開拓平和記念館のように、国内にも詳細な

展示と資料を整備している場所が存在する。また茨城県内原には、満蒙開拓青少年義勇軍の訓練所が設置されていたが、現在は内原郷土史義勇軍資料館となっている。こうした施設を訪問し取材することによって、代替する方法も考えられる。

「見附と満蒙開拓団」については、中央大学、北星学園大学、稚内北星学園大学と合同で、上映会を実施し、北海道稚内市、新潟県新発田市（敬和学園大学）、新潟県見附市で上映会をおこなったほか、2019年3月には、平和祈念展示資料館（東京都新宿区）でも合同上映会が実施された。こうした上映会は、他大学の学生の実作手法や関心の持ち方などへの理解を深める契機となるが、これを受けて次の作品に取り組む前に、卒業していったしまうのが通例である。

おわりに

かつて日本人が「満洲」と呼んだ、中国東北地方は、もともとロシアと日本が覇権を競い合った場所であり、一部地域には朝鮮半島から人々が流出してくる地域でもあった。現在は中華人民共和国の領土であり、清朝の打ち立てた女真族が覇権を握った場所でもある。この複雑な場所で、利権を獲得し、傀儡国家を建設した日本と、そこに渡った日本人にとって、この場所はどんな場所だったのか。この地域の多面性を、井出明は「プリズム」³⁰⁾ と呼び、山村信一は著書のタイトルにギリシア神話の怪獣「キメラ」を用いた³¹⁾。2019年に筆者が行った現地調査においても、広大な地域の中にある多様な側面をのぞき見ることになると同時に、当時の日本人がこの地に託したものを理解する困難さも自覚することになった。日本国内では、「満洲」で暮らした人々が徐々に少なくなり、全体像の理解がさらに難しくなりつつある。

こうした中、学生とともに映像作品を制作していくと、学生も教員も「日本と満洲」に関して、曖昧な理解を放置してきたことに気がつく。もっといえば、制作を進めていっても、この曖昧な理解が、解決されていないケースも少なくない。

新型コロナウイルスの感染拡大は、2020年以降数年に渡り、人の往来を大きく制限することとなった。もともと費用の問題により、大学生が「海外取材」を行う困難はあったが、2022年1月現在は、そもそも国境を超えた人の往来が難しい状況が続いている。しかし、「満洲」をめぐる過去の複雑な状況を理解するには、現地の訪問がかなり大きな意味を持つ。「海外現地取材」「ドキュメンタリー分析／文献研究」「国内取材」の組み合わせに、ダークツーリズムの視点を加えることは、ドキュメンタリー制作を中心とする情報メディア教育に厚みを与え、さらに多文化理解教育などと接続させることにもつなげることができるであろう。

※本研究はJSPS 科学研究費補助金（科研費）18K12000 の助成を受けたものである。

註

- 1) 岩野裕一『『満洲国』のオーケストラが教えるもの』西原和海・川俣 優編『満洲国の文化 ―中国東北のひとつの時代』(せらび書房、2005 年)
- 2) 「2020 年の人口センサスで見た中国経済の課題― 労働力の減少と地域間の移動を中心に ―」〈<https://www.rieti.go.jp/users/china-tr/jp/ssqs/210607ssqs.html>〉(2022 年 1 月 29 日確認)
- 3) NHK の「731 部隊」ドキュメンタリー、中国外交部も称賛＝「勇気を持って歴史の真実を明らかにした」―中国紙 (Record China) 〈<https://www.recordchina.co.jp/b560791-s0-c100-d0045.html>〉(2022 年 1 月 30 日確認)
- 4) 1980 年代に同記念館の様子を報告したものとして、勝部元「中国東北(満州)における二つの記念館と三人の日本人烈士」総合研究所報, 8(1)、15-30 頁、1982 年。
- 5) 抗日運動の闘士たちは、今日でもドラマによく登場するが、荒唐無稽な設定も多い。抗日映画・ドラマの変遷については、劉文兵「中国抗日映画・ドラマの世界(祥伝社新書、2013 年)
- 6) 井出明『ダークツーリズム拡張 近代の再構築』(美術出版社、2018 年)、182 頁。
- 7) 「『満州柏崎村』の跡を発見」(柏崎日報 Online) 〈<https://www.kisnet.or.jp/nippo/nippo-2005-06-20-2.html>〉(2022 年 1 月 30 日確認)
- 8) 譚玉齡の「毒殺」を扱ったものとして、入江曜子『貴妃は毒殺されたか―皇帝溥儀と関東軍参謀吉岡の謎』(新潮社、1998 年)。
- 9) 津田良樹『満州国』建国忠霊廟と建国神廟の建築について』『非文字資料から人類文化へ―研究参画者論文集』(神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議、2008 年)、71-87 頁。
- 10) 満映時代から中国共産党の接收にいたる経緯については、以下で中国語の解説がある。呂欽文 主編『長影文化博覧』(吉林美術出版社、2017 年)、273-289 頁
- 11) 持永については自伝である、『アニメーション日中交流記―持永只仁自伝』(東方書店、2006 年)がある。
- 12) 「敵の子」育てた中国の養父母 子供が日本に帰った後は：朝日新聞デジタル 〈<https://digital.asahi.com/articles/ASP513RK5P4XUHB1032.html>〉(2022 年 1 月 29 日確認)
- 13) 長春 「中日友好楼」の最後の「中国のお母さん」(人民網日本語版) 〈<http://j.people.com.cn/94638/203144/7911678.html>〉(2022 年 1 月 29 日確認)
- 14) 汪楠『怒羅権と私 創設期メンバーの怒りと悲しみの半生』(彩図社、2021 年)
NHK スペシャル取材班『半グレー反社会勢力の実像―』(新潮新書、2020 年)
- 15) 「中国からの帰国者(残留孤児)やその配偶者、二世らが利用する東京・板橋区のデイサービス施設」(TBS ラジオ、人権 TODAY) 〈<https://www.tbsradio.jp/archives/?id=p-509858>〉(2022 年 1 月 30 日確認)
- 16) 映画『再会の奈良』〈<https://saikainonara.com/>〉(2022 年 1 月 30 日確認)
- 17) 「満州事変 90 年 歴史を複眼視する重み」(2021 年 9 月 18 日 朝日新聞社説、2022 年 1 月 30 日確認)
「だが日本では、この日はそれほど意識されない。名古屋大学名誉教授の安川寿之輔(じゅのすけ)さん(86)が大学生を対象に毎年続けている調査でも、中国との戦争がいつ始まったのかを答えられる学生はあまりいないという。」
- 18) 井出前掲書、190 頁。
- 19) このとき首謀者であった河本大作らの処分を曖昧にしたことが、その後の軍部の暴走「下剋上」を許したという悔恨を、のちに昭和天皇が語っている。
「繰り返し戦争を回顧 後悔語る」(昭和天皇「拝謁記」戦争への悔恨 | NHK NEWS WEB) 〈<https://www3.nhk.or.jp/news/special/emperor-showa/articles/diary-repentance-01.html>〉(2022 年 1 月 30 日確認)

- ETV 特集「昭和天皇が語る 開戦への道 前編 張作霖爆殺事件から日中戦争 1928-1937」(2021 年 12 月 4 日 NHK E テレ放送)
- 20) 大連駅を題材に「植民地建築」について、大連の人々のアイデンティティの形成と関係を調査したものに、鄭芸「植民地建築としての中国・大連駅に見る戦後大連人アイデンティティの形成」お茶ノ水地理、Vol.57、2018 年、40-48 頁。
- 21) 松村 嘉久「長春における満州国時代の観光資源をめぐって」2014 年度日本地理学会秋季学術大会発表要旨
- 22) 「満鉄記録映画集 【2】」(ケー・シー・ワークス)
高媛「満鉄の観光映画——『内鮮満周遊の旅 満洲篇』(1937 年)を中心に」『旅の文化研究所研究報告』28、2018 年、43-65 頁。 作風としては、台湾を紹介した国策映画「南進台湾」(1939 年)と共通点が見られる。拙稿「台湾におけるダークツーリズム：「霧社事件」関連施設を中心に」敬和学園大学紀要 30 号、1-22 頁。
「日本統治下の台湾——南進台湾(日治時代の記録映画)」(ケー・シー・ワークス)。
- 23) 「731 部隊の真実 ～エリート医学者と人体実験～」(N スペ Plus) < <https://www.nhk.or.jp/special/plus/articles/20170915/index.html> > (2022 年 1 月 30 日確認)
- 24) 山口淑子・藤原作弥『李香蘭 私の半生』(新潮文庫、1987 年)
- 25) 佐藤ハルエさんの証言は、NHK 戦争証言アーカイブスでも公開されている。「佐藤 ハルエさん | 証言 | NHK 戦争証言アーカイブス」 < https://www2.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/shogen/movie.cgi?das_id=D0001130365_00000 > (2022 年 1 月 30 日確認)
また、取材内容の書籍化も行われている。
川 恵実・NHK ETV 特集取材班・田中佳奈『告白』(かもがわ出版、2020 年 3 月)
- 26) NHK スペシャル “大地の子”を育てて～中日友好楼の日々～ | NHK ティーチャーズ・ライブラリー < <https://www.nhk.or.jp/archives/teachers-l/list/id2019027/> > (2022 年 1 月 30 日確認)
- 27) 「消えた大学 幻の満州の夢」(テレメンタリー 2020) < <https://www.youtube.com/watch?v=sjBZOKw0vI4> > (2022 年 1 月 30 日確認)
- 28) 「多摩探検隊・にっぽん列島探検隊」 < <https://www.youtube.com/user/TamatanArchives> > (2022 年 1 月 30 日確認)
- 29) 樺太・サハリンをテーマとする作品群のうち、全映協グランプリ 2016 文部科学大臣賞を受賞したのが、「私たちは、【カラフト】を知らない。」 < <https://www.youtube.com/watch?v=2W2qr6zWDuA&t=92s> > (2022 年 1 月 30 日確認)
- 30) 井出前掲書、168 頁。
- 31) 山室信一『キメラ 満洲国の肖像 (増補版)』(中公新書、2013 年)